

修験の道を再興 労力と財を結集

新宮山彦ぐるーぷ

地道な活動が大きな成果

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に指定され、熊野と吉野を結ぶ修験道として知られる「大峯奥駈道（おおみねおくがけみち）」その南半分にあたる熊野本宮大社と太古ノ辻（奈良県下北山村）約45kmの再興と整備、保全活動を続ける団体がある。昨年、結成40年を経過した「新宮山彦ぐるーぷ」。前会長で現在は相談役を務める玉岡憲明さん（90）が始めた地道な活動が同志を呼び、回峰行になぞらえて長年にわたって続けた刈峰行（かりみねぎょう）で通行不能だった道を見事に復活させた。活動に対する思い、会の功績を振り返る。

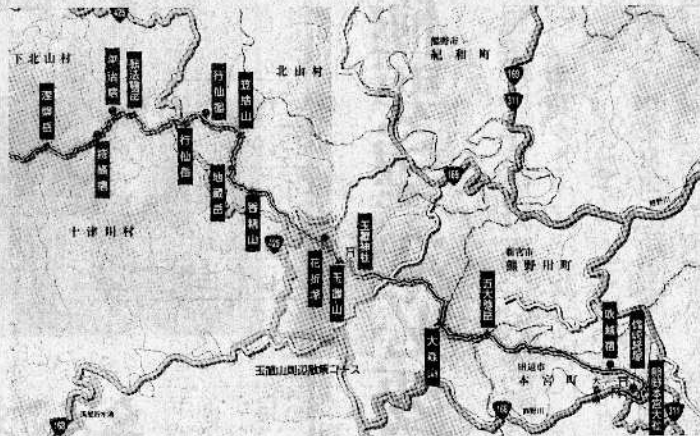
玉岡さんは昭和49年、山を歩いて自然に親しみ、体験を通して物を考えようと、「新宮山彦ぐるーぷ」を結成した。

当初は、和歌山、三重、奈良3県の山々を歩きながら、空き缶などを拾い集める美化活動に努めた。修験道の整備に携わ

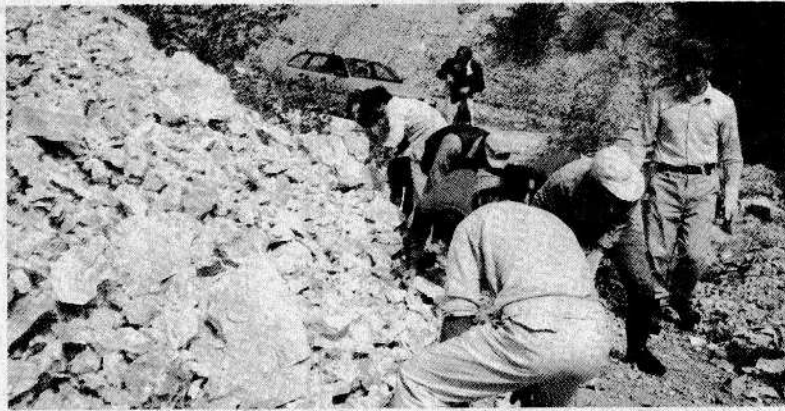
るようになったのは、田辺市を拠点とする登山グループ「奥駈葉衣会」との交流がきっかけだった。この会の中心メンバーだった前田勇一氏は奥駈道の再興を目指し、行者が宿泊できる小屋「持経宿」を建設したが、

その後、志半ばに止まった。前田氏の活動に心を打たれた玉岡さんは遺志を継いで、難行に挑む決意をした。

当時の奥駈道南半分は草に閉ざされ通行不能になっていた。初めて会員



南奥駈道のルート(十津川村発行のパンフレットから)



白谷林道は至るところで落石が押し出し、人海戦術でどける (平成8年5月、第50回刈峰行)